

中国における異文化理解

今日の世界は経済のグローバル化が進む一方で、全人類は環境汚染、戦争など厳しい現実と直面しており、異民族の理解が重要になっている。異文化理解とは、国外ばかりではなく、国内の少数民族の独自性を尊重し、異民族間の相互理解をはかること、すなわち「内なる異文化理解」の達成が前提条件となる。

新疆ウイグル自治区の場合 中国は国土が広く、56の民族が存在し、長い間、民族問題を抱えている。とくに中国西北部の新疆ウイグル自治区の民族間葛藤は激しいものだった。

1949年から、中国政府は辺境の発展のために多くの漢民族知識層青年を新疆に派遣する。これは新疆を建設するために役立った。この漢民族知識層青年は内地の同じ職業に就く人と同じ賃金を貰って、新疆の経済をはじめ、文化、医療、交通など多方面に貢献した。何十年にもわたる各民族の努力の結果、新疆は驚くほど発展し、遊牧の生活スタイルから近代化をはかってきた。しかし、漢民族の移住によって、漢民族と少数民族間に生じた異文化摩擦は激しくなる一方であった。

異文化摩擦の要因 中国政府の“大漢民族主義”は少数民族との摩擦が起こる要因といえる。“大漢民族主義”とは、歴史的に見ると、漢民族は国家形成の過程で絶対的な主体であり、その人口は中国人口のほとんどを占め、漢文化は他民族文化に比べ、はるかに優位に立っており、その結果、自然に漢民族が自慢と優越を感じ、無意識のうちに他民族を退ける傾向が生じていることをさす。90年代には少数民族の集まっている地方に派遣されたが、たとえば新疆ウイグル自治区ではウイグル語を話せない強権的な漢民族のリーダーが、一部の地域でウイグル族と漢民族の緊張関係を生じさせた一つの要因となっているようである。

中国政府の解決策 中国政府は新疆の民族問題を解決するために一連の優遇政策を実施している。70年代後半、中国政府は新疆で大学進学、徴兵、就職において、



ウイグル族の文化 布で包んだナンをかざして花嫁の平安・円満な生活を祝う。

ウイグル族の占める割合を60%まで引き上げるといふ“三つの60%”政策を実施した。計画経済時代、除隊した人は安定的な職業に就くことができた。教育でも、新疆の少数民族が自民族の学校を開設し、自民族の言語

および文字を保つことを、政府は支援している。大学進学の間では、少数民族の受験生は特別に優遇され、同じ大学でも、漢民族の半分の点数で合格できる。

しかし、中国政府のこうした政策はウイグル族の評価を得られなかっただけでなく、漢民族の強烈な不平を買うことになった。彼らは、自分の青春時代を捧げて働いたのに、政府は不平等な政策で報いたという思いを抱いた。このほか、中国政府は新疆の少数民族のために実質的な困難を解決してくれる政策を毎年実施したが、これも、少数民族の中央政府に対する見方を変えることができなかつた。かえって、彼らは中央政府に対する敵対感情を新疆在住の漢民族に対する虐げという形で表すようになった。

真の解決策を 根本的に民族問題を解決する手段は教育である。異民族の文化に対し、寛容な態度を持つ、尊重するなどの意識を育成する必要がある。さらに、異文化を勉強し、理解し、そして受け入れることが、心から異民族を受け入れる道である。少数民族自治区では、異文化を理解する課程を開設し、異文化理解を促進しなければならない。

中国政府は現在の「優遇政策」を改善すべきである。漢民族と少数民族に対し、同等な教育を受けさせ、両者の知識レベルを縮める教育政策を実施すべきである。さらに、漢民族と少数民族との共同活動を設け、両者の交流を促進し、理解を深めさせるべきである。社会経済を発展させるのはもちろん大切である。経済の発展によって、各民族の経済上・教育上の格差が縮小され、民主化が進められ、相互理解も進むだろう。たとえば、中国政府が実施している「西部大開発政策」も新疆の民族間交流を促進する一つの方法と考えられる。

((財)守屋留学生交流協会第23回奨学生 朱銘)